

白山ふるさと文学賞

第十回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生作文の部 最優秀賞

新しい自分を見つけて

松任中学校二年

番作 ばんさく

優奈 ゆな

「どうして私はここにいるんだろう…。」
病室のベッドに横たわってぼんやりと天井を見つめながらそうつぶやきました。

私はある日突然、激しい運動をしてはいけない体であることが検査で判明し、入院することになりました。これは私にとつての人生一大事です。大好きだったバトントワーリングを続ける事が出来なくなつたからです。私は今年もバトンの団体演技に出場し、全国大会を目指してチームの練習に参加していた矢先の事でした。それが突然の入院により、大会出場を辞退するばかりではなく、バトン自体も諦めなければならなくなつてしまつたのです。また、私は以前の大会で個人的にも悔しい思いをしていたので、絶対にリベンジしたいという思いがありました。そのチャンスさえも失い予想もしていなかつた引退がやつてきたのです。私は医師の先生の説明を聞いて混乱し、目の前が真っ暗になりました。こんな自分の体が悔しくて絶望的で不幸で

「何で私だけが…。」
とも思いました。自分の立ち位置が変わつた一日でした。

入院生活では毎日点滴につながれ、両足は筋肉破壊が起きていたため感覚が無い程の痛みで全く歩けません。ベッドの上では楽しい事など全く考えられません。自分の生きがいを奪われたからです。また、学校へ通えず友達に会えない寂しさや勉強への焦りも感じていました。病室の夜は暗く静かで、私の未来も真っ暗な闇に吸い込まれていく様な気がして、絶望感が押し寄せてきました。そして、私は思いました。

「これから、いつまで体育の授業を見学し続けなければいけないんだろう。」

「風を切つて走るあの爽快感をもう二度と感じることは出来ないのだろうか。」

病室で考える時間があつすぎて、「出来ないかもしれない事。」が次々と

浮かんできて、私は他の人に気付かれない様に声を押し殺して泣きました。一粒一粒落ちていく点滴が、私の涙と重なりました。

入院中は母が、毎日面会に来てくれました。母は私を元気づけるために明るく会話を始めますが、

「気付いてあげられなくてごめんね。」

と言つて毎回涙を流していました。そして、

「今気付いて良かったね。」

と泣き顔で無理矢理笑っていました。続けて

「神様は人に試練を与えるけれど、きっとそれを乗り越えられる人にか与えないんだよ。」

と力強く私を励ましてくれました。まるで自分に言い聞かせている様でした。

入院生活の最初は暗く落ち込んでいましたが、身の回りのお世話をし下さる看護師や、病室の清掃員の方、保育士さんとはとても優しく、いつも笑顔で私に話しかけてくれました。将来の夢や学校の事、勉強の事、好きな漫画の事などどんな話でも興味を持って聞いてくれました。病院内の皆さんは太陽の様に明るく前向きな人ばかりで、どん底の気持ちだった私は勇気付けられました。

退院が近付いてきた頃、先生と話をしました。先生の言葉は予想外のものでした。

「大好きだったバトンは出来なくなつたけれど、全く運動が出来なくなる訳じゃない。日常の学校生活から始めて少しずつ運動してみよう。」

と言う事でした。やってみたい事は積極的に希望を言つてほしいし、どんどん挑戦してみようと伝えられました。私は自分の体と向き合いながら、自分のやりたい事を考えて先生に提案する事が出来ると聞き、目の前に光が見えました。そして先生は、私の病気を「個性」だと言つてくれました。悲観的な言葉ではなく、前向きな言葉を選んで私の背中を押してくれたお陰で、病気になつた事が私の人生において意味のある物だ

と初めて思いました。

私はこれから先、多くの制限の中で生きて行く事になります。外見からは病気だと分からないためきつと誤解されたり辛い思いをする事もあ
るだろうと思います。しかし私は病気がきつかけで、自分の立ち位置が
大多数側から少数派側に変化した事でこれまでと見える景色も変わりました。
私が得た個性は、少数派の意見を持つ人や、特殊な悩みを抱えて
いる人に気付き、その考えや悩みに寄り添い軽蔑せずに受け入れてあげ
る事だと思えます。私もこの体質を受け入れて、ありのままの自分を受
け入れて堂々と生きて行きたいです。

私は暗い闇のトンネルを抜けて、今から前を向いて歩き出します。
私は生まれ変わったのです。

